

〈教育実践研究〉

# 「教育相談」における学級集団の理解と考察

## —心理テスト「Q-U」の活用と分析を通して—

青木一起\*

### 1 はじめに

平成27年の中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」において「大学が教職課程を編成するに当たり参考とする指針を受け、教員の養成、研修を通じた教員育成における全国的な水準の確保を行っていくことが必要である。」との提言を受け、教職課程科目のコアカリキュラムが示された（文部科学省2017）。

「教育相談の理論及び方法」におけるカウンセリング教育は、教師がカウンセリングの基礎知識（カウンセリングの意義およびカウンセリングの理論や技法について）をもつことが目的とされている。このように、これからの新規採用の教員は、既にこれらのことを学んでいると想定されるため、教職課程の授業において、より実践的な能力を育成し、現場における即戦力となるようにしなければならないと考える。

文部科学省（2020）は「令和元年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」において、いじめの認知件数は前年度比6万8,563件増の61万2,496件で過去最多を更新。小・中・高校・特別支援学校のうち、小学校が8割近くを占めているとの結果を公表した。これまでも様々な取り組みがなされているにも関わらず、依然「いじめ問題」に関しては多くの課題がある。また、総務省行政評価局（2018）「いじめ防止対策の推進に関する調査結果報告書」によると、いじめの発見にはアンケートによるものが多いとされ、「いじめ防止対策推進法」（2013年9月施行）では、いじめ早期発見のための措置として「定期的な調査」を学校に義務づけられた。その中においても、心理テスト「Q-U」は実施部数500万部以上を誇り業界1位となっており、様々な小中高校で利用され教育業界において非常に認知度が高いテストとなっている。ある政令市においては、市の「いじめ防止基本方針」の取り組みにおいて、hyper-QU（Q-Uに、ソーシャルスキル尺度を加えた検査）がいじめの早期発見にも有効であるとの考えから、重大事態の再発防止策の一方策として、平成28年度から年2回実施している。また、設置校に対して、①当該検査の回答を業者に送付する前にいじめのヘルプシグナルの事項を確認すること、②小学校卒業後は検査結果を中学校に申し送ること、③当該検査で「要支援群」に区分された児童生徒は校内で情報を共有し継続的な声かけなどを行うよう学校に指示している。また、中学校においては、SCが生徒別にヘルプシグナルを確認の上、データベース化し、情報を共有するとともに、以前の回答内容と比較している。その上で、いじめの兆候が見られる場合はSCや担任が面談を実施することなどが求められて、その具体的な活用方法まで示唆している。

そこで本稿では、教職課程を履修する学生に、教師としての実践力と即戦力の育成のため、いじめ・不登校などの早期発見と対処方法など、学級経営に関わる資質・能力を高めるとともに、望ましい学級集団づくりのための児童生徒理解に向け、全国各地の学校現場で活用されている「hyper-QU」の分析及び活用方法を理解しておくことの有用性について提案したい。

---

\* 名古屋学芸大学ヒューマンケア学部特任教授、東海学園大学非常勤講師

## 2 学級集団の理解と方法

生徒指導提要(2010)では、「教育相談は、児童生徒それぞれの発達に即して、好ましい人間関係を育て、生活によく適応させ、自己理解を深めさせ、人格の成長への援助を図るものであり、決して特定の教員だけが行う性質のものではなく、相談室だけで行われるものでもない。」とされ、発達心理学や認知心理学、学校心理学などの理論と実践に学ぶことも大切であり、相談実施に際して、計画的、組織的に情報提供や案内、説明を行い、実践することが必要であるとする。

また、中学校学習指導要領解説(2017)特別活動編では、「学校生活への適応や人間関係の形成、進路の選択などについては、主に集団の場面で必要な指導や援助を行うガイダンスと、個々の生徒の多様な実態を踏まえ、一人一人が抱える課題に個別に対応した指導を行うカウンセリング(教育相談を含む。)の双方の趣旨を踏まえて指導を行うこと。特に入学当初においては、個々の生徒が学校生活に適応するとともに、希望や目標をもって生活をできるよう工夫すること。あわせて、生徒の家庭との連絡を密にすること。」とある。従来と比べると、ガイダンスとカウンセリング双方による特別活動における配慮をはじめ、各教科等でもその機能を生かすなど、学校の教育活動全体を通じてガイダンスとカウンセリングの機能を充実していくことが大切であるとしている。小学校学習指導要領「総則」においては、教育課程の編成や実施に当たって「学習や生活の基盤として、教師と児童の信頼関係及び児童相互のよりよい人間関係を育てるため、日頃から学級経営の充実を図ること」とされ、中学校学習指導要領(2017)総則編第4節「生徒の発達の支援」においても「学習や生活の基盤として、教師と生徒との信頼関係及び生徒相互のよりよい人間関係を育てるため、日ごろから学級経営の充実を図ること。」とあり、教師の営みとして学級経営の重要性を明確に位置付けている。さらに、学級経営上で最も重要なのは確かな生徒理解であるとし、その方法として、観察法や面接法、およびアンケート法などにより、一人一人の生徒を客観的かつ総合的に認識することであるとしている。生徒指導提要(2010)の第1章「生徒指導の意義と原理」においても、学級経営の中に生徒指導の視点がきちんと位置付けられ、それに基づいた学年や学級経営が行われ、さらには、個々の教員の指導が行われていくことが大切であるとして、学校全体で進める生徒指導の中核を学級指導が担っているとしている。しかし、学級経営の定義は曖昧で、広義にわたるとしていたが、中央教育審議会(2006)の共通科目部分における各内容の具体の例として、「学級経営に関する内容」を9項目(①学級経営の内容と果たす役割②学級経営と学年経営③学級の組織作り④児童生徒による活動の運営⑤学級集団づくり⑥日常の指導⑦保護者と連携を図った学級経営⑧保護者への助言⑨学級事務の内容と留意事項)を例示した。そこには、学級経営の内容と果たす役割や学級の組織作り、保護者との連携などが列記され、その重要な位置づけになっているのが「学級集団づくり」である。

河村(2010)は「学級集団は、子どもたちにとっての社会であり、そこで生活や活動を通して、子どもたちに知識や社会性、対人関係能力、道徳意識を、総合的に身につけさせようというのが日本の学校教育の原理と言えらる」と述べ、日本の学校教育は、「メンバーが固定された学級集団で、生活や様々な活動、授業に取り組むという制度と、教師がガイダンス・生徒指導を総合的に指導するという制度を併せもっている」と指摘する。このように、学級内における子ども同士や教師との関係が大きく学級集団に影響を及ぼしているのである。教師の働き方改革が、問題視されているが、通常、学級担任が学級経営のみならず、学校教育全般を担い、教師個人に対する仕事内容や仕事量は膨大な状況下で教育活動を行っているという現状もある。

このように、子ども達の発達を支えるためには、教育相談という狭義な用語にとらわれず、児童生徒の発達の特性や教育活動の特性や実態を踏まえ、予め適切な時期・場面において、主に集団の場面で必要な指導・援助を行うガイダンスと、個々の児童生徒が抱える課題に対して、その課題を受け止めなが

ら、主に個別指導により解決に向けて指導・援助するカウンセリングを、それぞれ充実させることが重要である。これらのことを学級経営を中心に、各教科等において実践する必要があることを「教育相談」の講義において、具体的に教育現場を想起させながら周知させていった。

### 3 心理テスト「Q-U」の理解と課題

Q-U (QUESTIONNAIRE-UTILITES) は、早稲田大学の河村茂雄教授が開発した、学校・学級生活への不適応、不登校、いじめ被害の可能性の高い子どもを早期に発見できる心理テストである。これは、学級集団をアセスメントし、より適切な支援をするための補助ツールとして、児童生徒の心理的な側面を質問紙法を用いて調査し、その結果から児童生徒理解を深めるものである。内容は、「①学級満足度尺度：居心地の良いクラスにするためのアンケート」と「②学校生活意欲尺度：やる気のあるクラスをつくるためのアンケート」から構成されている。また、hyper-Q-U (hyper-QUESTIONNAIRE-UTILITES) は、「①学級満足度尺度と②学校生活意欲尺度」に加え、「③ソーシャルスキル尺度：ふだん(日常)の行動をふりかえるアンケート」から構成されている。アンケート調査自体は、調査項目に4択で応えるだけの15分程度で、児童生徒一斉に実施できる。学級集団の分類は標準化された尺度である「学級集団アセスメント Q-U」であり、妥当性をみることができる。分析結果は、「個人」「学級集団」「学級集団と個人の関係」の3つの側面を把握できるようになっている。アンケート結果はデータ化・グラフ化され、関係性が理解しやすくなっている。さらに、一年に2回実施することを想定され、データ結果を前回と今回で比較・検討することができ、それを基に、前回の結果から改善を行った教育実践の効果を2回目のアンケート結果から確認できるとされる。

現在、Q-U、hyper-Q-Uを実施している学校は年々増加傾向にある。その多くは、教育委員会単位で一斉に実施される傾向にある。なぜなら、子どもたちの学級生活での満足度と意欲を測る心理検査として実施することによって、「いじめ被害を受けている可能性の高い子どもはいないか」「不登校になる可能性の高い子どもはいないか」「学校生活で意欲が低下している子どもはいないか」「学級崩壊に至る可能性はないか」「学級集団の雰囲気はどうか」などの情報がわかるとされているからである。しかし、Q-U実施後の活用に関しては、学校で選択したのではなく、多くの学校は教育委員会の施策として実施している状況もあり、各校によってかなりの温度差が開いているのが現状である。このアンケートから得た児童生徒の情報や心の声や叫びを活用できていない状況を学校現場の教員に聞き取ると、次のような課題がみられた。「結果を学校・学年で分析したり、共有したりする時間や機会がない。」「要支援群や不満足群に属する児童生徒は把握するが、学級全体をとらえるという視点は弱い。」「各質問項目に児童生徒がどのような回答をしているかチェックすることがなく、児童生徒のヘルプサインが見逃されている。」「結果が教員評価として扱われるのではないかと不安から、Q-Uに対して抵抗のある教員がいる。」「結果を見ても、今後どのような対応をすればよいのか分からない。」「今後の対応について、担任のみに任されており、学年や学校全体で各学級を支えていくという視点が弱い。」などである。

Q-Uの活用にあたっては、学級を全体として見ること、全体的な雰囲気に関する結果を踏まえて学級運営の改善に役立てることも重要であるのに対し、学級担任の意識は、そのあたりを具体的にどう生かすかというところには至っていないのが現状である。その結果、有効に活用するための手順を定め、校内で丁寧な説明を実施しているとはいえ、各学級単位では、Q-Uの結果が必ずしも十分生かされているとはいえない状況なのである。

では、児童生徒側からみたQ-Uアンケートはどのようにとらえられていたのだろうか。そこで、筆者の勤務する教職課程「教育相談」受講生、2年125名に対して、小中学校在籍時におけるQ-Uアンケートの実施時期と意識について尋ねる。その後、Q-Uアンケートの分析と活用についての学習後、論述課題

に取り組みさせた。そうすることで、これまでの学校の取り組みの様子を振り返り、今後の課題を考察することとした。

まず、Q-U アンケートについて、受けたことがあるかとの問いに対して(表1)は、12%の学生しかあると答えなかった。Q-U アンケートについて説明の後、いつ受けたかという問いにも、中学校、高等学校が多く、小学校で実施したという回答が少なかった。(表2) 本受講生は、名古屋市出身者は全体の10%で愛知県が25%岐阜県25%でその他全国各地からの出身者で構成されている。しかし、本講義において、Q-U アンケートの質問事項と内容を説明すると、実施したことを想起でき、学生の記憶に大きな誤解があることが分かった。また、アンケート実施後の各学校の取り扱いや取り組みの姿勢も大きな違いが出ていることが分かった。そもそも、名古屋市出身者においては、小学校4年生より中学3年間まで毎年2回実施してきている筈である。他府県についても同様であり、確かに実施していない市町もあったが、後の調査では75%の学生は実施していたらしいことも分かった。

Q-U の実施に関するアンケートが実態と大きく違っていった理由としては、「アンケート項目には記憶があるがQ-U という名称だと知らない。」「アンケートをやったけど、何のために行ったか分からない。」などの意見が多く、教育現場においてQ-U アンケートを実施しているものの、アンケートそのものの意味を子どもへ丁寧な説明が行われなかったり、アンケート結果についてのフィードバックがしっかりされていなかったりすることに要因があると思われる。実際には、児童生徒向けに結果を知らせる用紙があるものの、もらったとする記憶が薄かったようである。これは、各学級における実施やフィードバックの方法に問題があるのではないと思われる。そこで、教員を目指し、教職課程を履修する学生に、学級経営の大切さとともに、学級集団の客観的な理解と方法を学んでおくことが大切ではないかと考えた。

## 4 Q-U の分析による学級集団の理解と方法

Q-U の活用について学校による差は、Q-U についての理解の差ではないかと考えた。上記の実態を踏まえ、教職課程「教育相談」受講生に対して、学級集団の理解と方法の一助として、「Q-U 検査で分かること」、「Q-U 結果の見方」、「Q-U を活用した学級経営について」等の講義と実習を行った。

### (1) 「Q-U 検査で分かること」

Q-U 検査のアンケート内容は、「学校生活意欲尺度 (やる気のあるクラスをつくるためのアンケート)」と、「学級満足度尺度 (いごちのいいクラスにするためのアンケート)」と「ソーシャルスキル尺度 (日常の行動をふり返るアンケート:hyper-QU) で構成されている。(表3) 例えば友人関係については、「①学級内には、いろいろな活動やおしゃべり、誘って友人がいる。②学級内には気軽に話せる友人がい

表1 Q-U 受講の有無

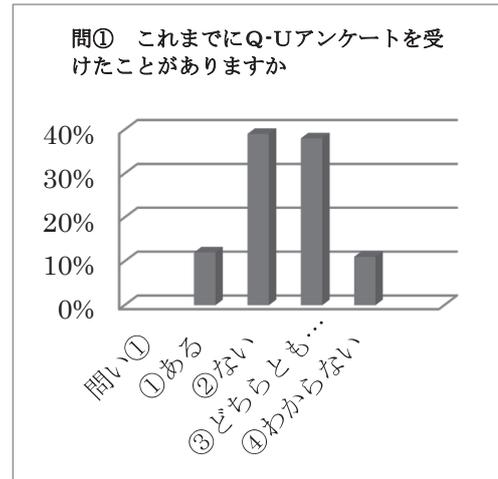
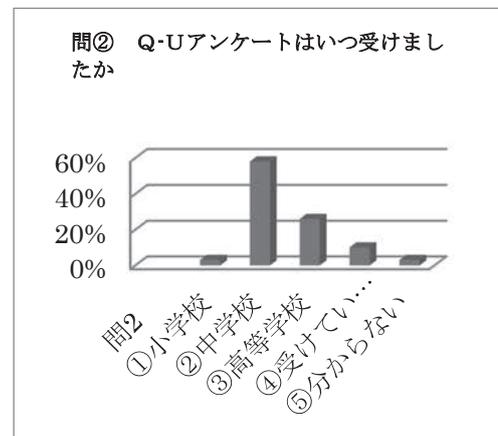


表2 Q-U 受講の時期



る。③人と仲良くしたり友人関係をよくしたりする方法を知っている。」などの項目に5段階の指標で答える。承認得点の項目では、「私はクラスの中で存在感があると思う。自分を頼りにしてくれる友人がいる。」などの項目があり、また、被侵害得点の項目には、「⑪クラスの人から無視をされるようなことがある。⑫クラスや部活動でからかわれたり馬鹿にされたりするようなことがある。⑬授業中に発言したり先生の質問に答えたりするとき冷やかされることがある。⑭クラスメートから耐えられない悪ふざけをされることがある。⑮クラスで班をつくる時など、中々班に入れず残ってしまうことがある。⑯クラスの中で浮いていると感じることがある。⑰休み時間などに一人であることが多い。⑱クラスにいるときや部活動をしているとき、周りの目が気になって不安や緊張をえることがある。⑲学校に行きたくないときがある⑳私はクラスメートの友人関係についてあまり知らない㉑友人からネット上で何度も悪口を書かれたり嫌なことをされたりする。㉒ネット上で仲間外しをされたり、無視されたりする。」などと、いじめや不登校の予兆となることがうかがわれる項目やSNSなどで侵害されていないか等を尋ねる項目がある。

これらの項目によってどんなことが分かるかをまとめていくと「いじめ被害を受けている可能性の高い子どもはいないか」「不登校になる可能性の高い子どもはいないか」「学校生活で意欲が低下している子どもはいないか」「学級崩壊に至る可能性はないか」「学級集団の雰囲気はどうか」ということであることへの理解を促した。

## (2) 「Q-U 結果の見方」

学級満足度尺度とは、学級集団が児童生徒にとっていごちよい場所であるかということである。これが充足されれば、学級集団への適応感が高まるだけでなく、諸々の活動に主体的に取り組む意欲につながる。児童生徒が所属する学級集団をいごちがよいと感じるのは、「ルール」（トラブルやいじめなどの不安がなくリラックスできている状態）と「リレーション」（自分が級友から受け入れられ、考え方や感情が大切にされていると感じられる）が満たされた時である。この視点を得点化し、これを座標軸にし、児童生徒を次の4つのタイプに分けて理解する。「承認得点」と「被侵害得点」の2つから、4群に分類されたプロット（表4）により、学級の状態や個々の位置から次のようにアセスメントする。

【学級生活満足群】…承認得点が高く、被侵害得点が低い児童生徒。学級内に自分の居場所をもち、学級生活を意欲

表3 QUの尺度内容（「実施要項」を参考に作成）

友人との関係
学校生活意欲尺度
学習意欲
教師との関係
学級との関係
進路意識
承認
自分が友人や教職員から認められていると感じているか
学校満足度尺度
被侵害
いじめ・冷やかしなどを受けていないか、不適応感はないか
配慮
ソーシャルスキル尺度
対人関係上の基本的なマナーやルールの遵守
かかわり
人との積極的なかかわりや関係の維持

表4 QUのプロット図（「実施要項」を参考に作成）



的に送っていると考えられる。

【非承認群】…承認得点と被侵害得点がともに低い児童生徒。不適応感やいじめや侵害行為を受けている可能性は低いが、学級内で認められることが少なく、自主的に活動する気持ちが弱い。

【侵害行為認知群】…承認得点と被侵害得点がともに高い児童生徒。学級生活や諸々の活動に意欲的に取り組むが、そのプロセスでトラブルが生じてしまうことが多い。また、物事に対して、過敏な反応を示す児童生徒の可能性もある。

【学級生活不満足群】…承認得点が低く、被侵害得点が高い児童生徒。いじめ被害や悪ふざけを受けている可能性が高い。学級集団への適応感は低く、不登校に至る可能性もあると考えられる。なかでも、要支援群の児童生徒には早急な対応が必要である。

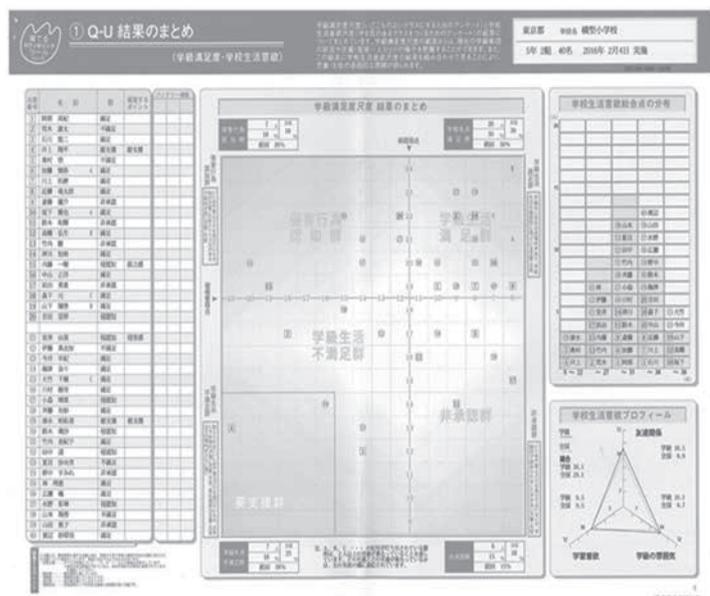
このように、心理テストの客観的な指標からも児童生徒をアセスメントすることができることへの理解を促した。

### (3) 「Q-U を活用した学級経営」

河村 (2015) は、大学の教職課程においても、「教科教育と生徒指導・教育相談などの科目を学級集団の中でどのように統合して展開していくかを教えていない、また、先輩教員が若い教員を指導する風習がなくなりつつある。」として、学級集団像とそれにいたる学級集団作りの方法論の確立の重要性を訴える。さらに、「近年の学校教育においては、実証的証拠（エビデンス）に基づいた教育実践、及びその成果が問われ、保護者等に説明する責任を果たす必要がある。」と、根拠に基づいた教育が必要であると述べている。これまでの学級経営は、学校現場にある多くの経験値により、個々の担任の力量に任されていた面が強い。しかし、それらの学級経営の有効性の根拠はその実践者のみにものであり、ある教員が行って有効だった方法が一般化され、どの学級においても活用できるかのように伝えられている場合も少なくない。また、近年においては社会の構造も複雑化し、多様な地域や家族構成により、その対応も困難になってきている。

そこで、Q-Uの分析を活用によって、経験の少ない担任でも、学級経営や教育実践の取り組みを確かな指標で測定し、客観的に個や集団をアセスメントでき、良好な学級集団を形成する展開や方法を導き出すことができるのではないかと考えた。実際に学校現場では、この検査は第1回目を5月から6月に実施することが多く、新たな学級に組織されて間もないころである。だからこそ、その検査実施後の分析と対応はその後の学級経営に大きく影響する。しかし、Q-Uの実施については、その結果の見方や活用の仕方についても、各学校によって格差があるとともに、実際の教育現場においても正しく理解して有効に活用できているとはいえない現状もある。また、教員への研修も学校によって様々であり総論的で一般的な見方は研修できるかもしれないが、自分の学級のみの特化した分析は行ってもらったり指導してもらったりすることも稀である。そのため、分析結果から緊急に対応を要する内容につ

表5 Q-U 結果のまとめ (見本例) (「図書文化社」QU 見本より)



いて早期に把握し、学級経営や個別指導に生かすためにも、この質問紙法による知識と分析の方法を理解しておく必要があるのではないかと考えた。

そこで、教職課程の「教育相談」の学級集団の理解のための一事例として、このようなQ-Uに関する基礎的な理解を図った後、図書文化社が作成した見本用の架空の学級表（表5）を活用して、実際に自分の学級であると想定し、分析と考察を行った。Q-Uによるアセスメントのポイントとしては、プロット図と意欲プロフィールの両方をよく見ることで、回答一覧表を見て生徒個々の質問項目への回答をつかむこと、学級満足度尺度と学校生活意欲尺度の結果を照らし合わせてみていくことなどに留意することを示した。また、Q-Uの結果と教員の日頃の観察と対照させるとズレがよくあることから、特定の教員の見立てや理解にとどまらず、学年や部活の教員など、教員集団で情報交換を行ったりしながら、多面的に児童生徒理解に心がけるとともに、支援方針についても共通理解を図ることが大切であることを指導した。

#### (4) 「学生によるQ-Uの分析と振り返り」

講義の最後に「表5のQ-Uの結果を見て、学級経営に生かすためにはどうしたらいいと思いますか？」という論述課題に取り組ませた。その結果、学生の多くは、まずプロット表にある要支援の児童に着目していたことから、児童のヘルプサインに気付き、早期に対応しようとする姿勢を感じることができた。また、学級の傾向としては「ゆるみのある学級」であることから、毅然とした態度で学級のルールを遵守させる指導が必要であり、学習意欲も学級全体として低い傾向にあることにも触れ、教師としての指導にも改善点があることに気付くことができていた。

教員を目指す学生の思いは真剣で、学生（A）の論述からは、分析方法を習得するのみでなく、結果を活用して学級経営に活かそうとする思いが伝わってくる。このことから、本時のQ-Uの理解や分析の経験が学級経営の参考になるとともに、学級集団を客観的に理解し、具体的に対応を考える資質・能力の育成につながったのではないかと考える。

#### 【2年生学生（A）の論述より抜粋】

まずは、要支援群にいる児童生徒をピックアップする。また、いごちのよいクラスにするためのアンケート⑦～⑩に[4]・[3]と答えている児童生徒もピックアップし、管理職や学年主任・学級担任に報告し、早急に個別支援・対応をしていく必要がある。いじめの事実確認を担任や養護教諭が被害者側と加害者側に実施し、関係者に報告をする。そして、学校全体で生徒指導をしていく必要があると考える。（中略）いじめは、どんな理由があろうとも悪いことなので、理由と行動は分けて考え、毅然とした態度で指導する。不登校ぎみの子どもには、引き続き、学校全体で支援を進めていくことが大切だと考える。次に、学級生活不満足群と侵害行為認知群の生徒をチェックする。授業の例でもあったように、周りからは仲の良いグループとみられていても、そのグループの中の1人は居心地が悪いと感じていたり、いじめまがいなことをされていたりするケースがあることを学び、普段一緒に行動しているグループでの居心地の悪さは、本人にとって、苦痛なことであると思うので、早期発見・早期対応が必要だ。上にも書いたように、いじめは、どんな理由があろうとも悪いことなので、理由と行動は分けて考え、毅然とした態度で指導する。侵害行為認知群の児童生徒には、他にも、全体指導の中での個別対応、トラブルが起きた時、理由や相手の気持ちを考えさせることが大切だと考える。また、学級経営に関しても、左下に点が集中しているようならば、学級崩壊が起きている可能性が高いため、早期対応が求められる。担任がなめられている場合は、他の先生を後ろに配置したりチームティーチングをしたりして、子ども達を指導していく。（後略）（\*原文まま、下線は筆者による）

## 【2年生学生 (B) の論述より抜粋】

・学級生活に満足している生徒が多くみられるが、学級生活不満足群、侵害行為認知群、非承認群に該当する生徒も見られるので、現在、学校生活満足群に該当する生徒が前に述べた3つの群に入っていないように学級を運営していかなければならない。(中略)・表からクラスの状態は、荒れ始め型学級と見られるので、今後崩壊した学級へと進んでいかなないように教師が毅然とした態度で生徒と関わっていき、新たに信頼関係を築いていかなければならない。・被侵害得点が高い生徒がいることが見られる。ここに該当する生徒は、他の生徒とトラブルを起こす可能性があるため、トラブルを起こさないように観察を行い、授業内で、他者について考えられるようにしていかなければならない。

(\*原文まま、下線は筆者による)

また、学生 (B) は、この事例の学級を「荒れ始め型」と学級として受け止めることでできた。それに対して、「教師が毅然とした態度で…」とその対応の姿勢から担任としての決意がみられる。学級崩壊を招く若い教師の中には、子どもを叱れない教師が多い。大きな声で怒鳴ったり高圧的な態度で子どもに接したりすることは良いことではないが、場合によっては真剣に子どもに向きあって指導し、しっかりと叱れるようになることも大切な教師としての力量である。

## 【2年生学生 (C) の論述より抜粋】

まず目につくのが要支援群の生徒が2人いる。この生徒たちははじめを受けていたり、不登校になっている可能性がある。そのため、早期に個別面接を行い、チーム学校として学年の先生などと協力しながら日常生活を観察し、異常がないか確認する。そして問題解決に向けてソーシャルワーカーやスクールカウンセラーと連携し、解決まで対応を続ける。みんなから認められていない生徒が6人いる。自主的に活動できておらず、意欲の低い生徒がいる。そのため、給食の時間やレクリエーションの時間を使ったり、授業の中で積極的にグループワークや中心に立たせてあげられるような環境を作ってあげるようにする。クラスの中に侵害行為認知型の生徒が多い。ルールやリレーションがしっかり機能していない可能性がある。学級に満足していない生徒がいる、要支援群の生徒たちがいるのは侵害行為認知型の生徒が多いことが原因かもしれない。そのため、学級を見直し、もう一度ルールやリレーションを確認する。そのまま放置しておくことがないようにし、全体の満足度を上げられるような見直しが必要となる。クラスの3分の1程度、現在の学級に満足していない。満足している人がいる一方で、何らかの理由で満足できていない生徒が多数いるため、学級づくりや日常生活、児童生徒同士の関係性を見直していく必要がある。

(\*原文まま、下線は筆者による)

学生 (C) は、要支援の子どもの対応に、早期な個別面接の必要性を訴えながらも、チーム学校というキーワードを使って、SC、SSW などとの連携を打ち出すなど、冷静な判断で対応する能力がついている。さらに、自らも担任として、学級指導において「ルールとリレーション」の確認を行う必要性まで言及できている。このように、事例によって具体的に分析したことにより、実際に学級や生徒を想定することができ、習得した知識・理解を言葉だけにとどまらずどのような場面において活用したらいいかを考えることができていた。

## 【Dの振り返りの記述】

資料や図を見ていると学級の現状や生徒のSOSなどが良く表れていると思った。自分が中学生、高校生の時に何度かアンケートがあったが、確かに面倒くさいと思うことが多かった。今思うとそれには大きな意味があり学級を知る、学年を知る上で欠かせない重要なデータだと感じた。個性が重視され、クラスの中で立場や性格から感じ方が異なり、それぞれ違った結果がでるがそのまま個性という言葉で片づけてしまっは教員としての大切な仕事を放棄している。個性を理解させ、みんなが同じ方向へ協力して成長していける学級づくりと結果がでた後の個別対応を含め、教員として様々な問題を対処する力が必要だと感じる。先生方への尊敬が日に日に大きくなると共に、教員はやはり非常にやりがいのある仕事だと感じた。

(\*原文まま、下線は筆者による)

さらに、講義終了後のDの学生の振り返りの記述には、実際に自らがアンケートに答えていた当時を振り返って、「個性という言葉で片づけてしまっは教員としての大切な仕事を放棄している」と、教員に対する厳しい目を持ちつつも、仕事としてのやりがいにも言及している。生徒指導の大変な中学校や高校時代で過ごした経験があるらしく、教師によっては問題行動に対して消極的だった姿も印象に

あるとのことであった。このように、学生の記述からは、自らの小学校・中学校・または、高等学校における教師の姿が規準となっていることが多い。教師としての姿勢や指導法、かかわり方が次の教師を育てることにつながっているのである。

さらに、学生の振り返りの記述からは、「アンケート結果から学級の傾向を読み取る力が教師には求められる。また、アンケート結果がすべてではなく、実際に生徒と関わることで傾向が見えてくることも忘れず学級づくりに取り組みなければならない。」「今回の授業では、学級の状況についてアンケートを通して具体的に測れる方法があることを初めて知った。アンケートを用いて学級の状況を知り、学級崩壊などを未然に防ぐことも必要であるが、教師を目指す立場としては、アンケートに頼る前に児童生徒と教員間での強い信頼関係を構築し児童生徒同士や児童生徒と教員の繋がりをつくることか大切であると考える。」と、アンケート至上主義に陥ることなく、結果に左右されるのではなく、自分でしっかり生徒との関わりや信頼関係を重視したいとの思いも伝わってきた。

何より特筆すべきは、「学生による Q-U の分析と振り返り」の学生の記述内容である。1 時間の講義における「Q-U 検査で分かること」「Q-U 結果の見方」「Q-U を活用した学級経営」の基礎知識と、プロット表の分析の体験によって、客観的な指標に基づいた正確な理解と、学級や児童生徒への早期対応や組織的な対応の必要性を認識できていることである。前述したように、実際の教育現場に置いても、毎年のように Q-U アンケートを実施し、研修も受けているはずである。問題行動の未然防止に役立てている一方で、教員としての経験値と思い込みによる子どもの実態の把握に阻害されて、有効に分析結果が活かされていない可能性も否定できない。だからこそ、教職に就いた時にこれだけの基礎的な知識や理解、技能を習得しておくことによって、形式的でなく、より活用が実践的に行われるのではないかと期待するところである。

## 5 考察

河村（2017）は、学級集団は、共同体（コミュニティ）の特性が強いからこそ互いの安定と成長のために責任を持ち合う意識と親和的な人間関係が必要条件となるとして、日本の学校教育が、教育課程と発達課題の達成を統合的に支援しようとしているところに課題があるとする。さらに、近年の学校現場ではこのような学級集団を単位とした授業と活動が成立しない「学級崩壊」や「いじめ」「不登校」問題が大きくなってきている。その背景には学校や学級が共同体として機能していない面が考えられる。

新規採用の教員の多くは、大学を卒業した1か月後には、担任として子どもの前に立ち、学級経営を余儀なくされる。そして、子どもの教育課題や発達課題、学業面や対人関係などの実態を把握しながら、理解と支援を行わなければならないのである。もちろん子どもへのアセスメントの基本は観察法と面接法が基本であり、重視しなければならない。しかし、最近の子どもたちを取り巻く状況を加味すると、表出する言動の背景や環境など、様々な角度から多面的に理解する必要がある。だからこそ、経験値だけでは把握できない面を客観的な指標と根拠で補うことも重要ではないかと考える。

今回の学生に対する Q-U に関するアンケートや聞き取り、学習後の学生の論述等からは、Q-U を実施する上で次のような課題も明確になった。まず、学校現場における Q-U のアンケートの実施の方法である。児童生徒にアンケートに対する意識が低いのは、実施する際に目的と方法を明確に説明していないことや、教師が事前に実施方法を確認していないこと、さらに、実施後のフィードバックが適切に行われていないことが要因ではないかと考える。そこには、この心理テスト自体が教育委員会の施策として実施されることが多く、教員の中には教職員評価に使われているのではないかと危惧をもっている上に、必然性も感じていない。そのため、やらされ感が強く、教員の中には、アンケート項目さえも周知しないで儀礼的に実施している場面もあるからである。次に、アンケート実施後の学校の対応であ

る。ある政令市では、Q-U アンケートの分析や活用について、毎年のように研修を実施し、学校によっては講師を招いて現職教育は行われているにもかかわらず、有効に活用できていない。これも、前述の内容に加え、担任教師の危機管理意識の低さに要因がある。実際に、要支援群の児童生徒に早期に適切な支援をできなかったことによる重大事態が発生している現状を組織として再認識することが必要であると考えられる。

## 6 おわりに

今回の講義は、決して心理テストを推奨したり、活用を促したりするのが目的ではない。本来は、心理テストに頼ることのない児童生徒理解と学級経営の力量を教師が有することが望ましい。しかし、初任者教師が、学級経営に困難さを感じ、子どもの指導に行き詰まり、自信を無くしたり指導方法に保護者の不信を招いたりしてしまうケースが多いのが現状である。そのような状況を見聞きし、学級経営に不安を抱える学生も存在するであろう。だからこそ、教職を目指す学生たちが自信をもって教育現場に立てるようにすることが教職課程を担当する我々の使命でもあるのではないかと考える。

前述の学生の論述からは、データに基づいて児童生徒のアセスメントが的確にできていたため、問題行動の対処や指導に自信さえ感じることができている。しかし、本稿では、履修した学生が、教師としての実践力と即戦力を備えることができたか、また、学級経営に関わる資質・能力を高められたかを検証するまでには至っていない為、今後も調査や研究を重ねていきたいと考える。

### <引用・参考文献>

- 青木一起 (2019) 「特別活動を要としたキャリア教育に関する教材・単元開発」日本教材学会第32回研究発表要旨集, pp50-54, 日本教材学会
- 河村茂雄 (2007) 「データが語る①学級の課題」 pp29-30 図書文化 東京
- 河村茂雄 (2015) 「こうすれば学校教育の成果は上がる」 pp6-9 図書文化社 東京
- 河村茂雄編 (2017) 「教育相談の理論と実際」 pp18-19, 図書文化社, 東京
- 総務省行政評価局 (2018) 「いじめ防止対策の推進に関する調査結果報告書」 pp29-32  
[https://www.soumu.go.jp/main\\_content/000538672.pdf](https://www.soumu.go.jp/main_content/000538672.pdf) (2018.3 閲覧可能)
- 中央教育審議会 (2015) 「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」(答申) pp16-18  
[https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2016/01/13/1365896\\_01.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/01/13/1365896_01.pdf) (2016.1 閲覧可能)
- 文部科学省 (2017) 「教職課程コアカリキュラム」 pp25  
[https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2017/11/27/1398442\\_1\\_3.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/11/27/1398442_1_3.pdf) (2017.11 閲覧可能)
- 文部科学省 (2010) 「教育相談の意義」 生徒指導提要 pp98-100
- 文部科学省 (2017) 中学校学習指導要領解説 特別活動編 pp135-137 東洋館出版 東京
- 文部科学省 (2020) 「令和元年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」 pp23-25  
[https://www.mext.go.jp/content/20201015-mext\\_jidou02-100002753\\_01.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20201015-mext_jidou02-100002753_01.pdf) (2020.11 閲覧可能)

## <巻末参考資料>

(参考) アンケート調査結果 (概略)

### <調査のねらい>

これまでのQ-Uアンケートの実施時期や取り組みの実態を把握するとともに、Q-Uアンケートの分析と活用についての学習後の意識の変化について調査し、今後の課題を考察する。

### <アンケート調査対象>

・教職課程「教育相談」受講生、2年 125名

### <アンケート調査方法>

・講義シートによる記述式 (記名)

### <アンケート調査項目と結果>

・あなたの出身地はどこですか? (県・市)

愛知県 23名 名古屋市 14名 岐阜県 32名 三重県 18名 静岡県 10名 その他 30名

問1 これまでにQ-Uアンケートを受けたことがありますか

1	ある	16名
2	ない	48名
3	どちらともいえない	48名
4	わからない	12名

\*実際には、記憶に残っていなかったのみの学生が多く存在していて、70%の学生が実施した経験があることが後に分かった。

問2 Q-Uアンケートはいつ受けましたか

1	小学校	8名
2	中学校	73名
3	高等学校	29名
4	受けていない	19名
5	わからない	10名

\* Q-Uのアンケート項目等説明後の学生からの聞き取り調査。(一部抜粋)

「アンケート項目には記憶があるがQ-Uという名称だと知らない。」

「アンケートをやったけど、何のために行ったか分からない。」

「アンケートについての説明がなかった」

「アンケートをただで、その後何もなかった」

「アンケートの結果を知らされていない」

「真剣に取り組まなかった、適当に書いた」等

\* Q-Uアンケートの実施上の留意や実施後のフィードバックが丁寧にされていない実態が分かった

## 問3 「Q-Uの結果からこの学級の傾向と担任として今後留意する点を考えて記述しましょう」(一部抜粋)

- ・学級内での交友関係やグループなどをよく見て、その中でQUの結果も照らし合わせ、見ていくことが大切だとおもう。  
また、不満足群など結果が低い生徒ばかりを見るのではなく、結果の高い(満足群)生徒もよく見て、何に満足をしているのか?偉い立場にいて満足していないから?など見ることも大事だと思いました。結果に惑わさせ過ぎずに、結果や生徒の一部に目を向けるのではなく、視野を広げて全体を見直すことが大切なのかなと思いました。
- ・クラスの約4分の1は学校生活・活動に満足し、意欲的に取り組んでいるため、おおむね心配はなさそうである。それに対し、このクラスの傾向として学級内で認められることが少なく、意欲の低い子どもと、自己中心的な面があり、ほかの子どもたちとトラブルを起こす可能性が高い子にバラけている。ここから予測されることとして、クラスの活動などで自己中心的な子の意見だけが通る、あまり活発的でない、一部の子だけで色々決めてしまうクラスになってしまう。担任としては意見を出してくれる児童生徒に話題を振りつつも、意欲が少なめの子たちにも「あなたたちはどう思うかな?」などという支援を留意したい。意見が出て、話題の指針ができたところで振り、意欲がない生徒も比較的話しやすい、興味がわきやすい環境を作ろうとするという魂胆である。次に留意したい点として、学級生活不満足群に5人いるのと、要支援組が2人いるという点である。不満足組は要支援組に陥る可能性を鑑みて、いじめなどの可能性を日ごろから気を付けつつ、学級の中で居場所があるのだと思えるような支援をしていくことを、日ごろから心がけていかなければならない。また、要支援組に関しては、不登校・いじめ被害などの原因を把握し、早急に個別的支援をしていく。このように全体の傾向と群ごとの支援を考え、日ごろから留意点を抑えておかなければならないと考える。
- ・学校生活を満足と思っている生徒が半分ほどしかいなく、誰かしら授業の妨害をしまっている生徒がいて、不満に思っている生徒がいる状況なので、妨害している生徒は誰なのかよく観察し、注意していかないといけない。
- ・生徒に対し、1対何十人という付き合い方ではなく、1対1で向き合って指導していかなければいけないと思う。1人ひとり生きている環境も能力も個性もみんな違うからその子にあった指導、言葉選び、対応をして向き合って向上心ももてる日常生活を作っていかなければならないのと、だからかそ1人ひとりの変化に気付いてあげることが必要・
- ・要支援群に入っている生徒がいるから、不登校やいじめへの個別支援をする必要があり、その生徒に個別面談を行い、早急に対応する。・学校生活不満足群に属している生徒は学級に居場所を見出せず、不登校になる可能性があるから注意して観察する。

(\*原文のまま)

問4 本講義の振り返り・感想等を記述しよう（一部抜粋）

- ・児童生徒を個々として見ておくのはもちろん大事なことであるが、集団として全体を理解し、どういう支援をしていかなければいけないかを考えることも重要であると感じました。教員としてどんな支援ができるか、しっかりと考えておこうと思います。
- ・学校はすべての生徒が有意義に生活できる場所であり、学びの場でもある為、全員が良い学校生活を送れるようにルールや指導をしっかり生徒に伝えなければならないと感じました。集団行動の中でいじめなどにならないように、日頃からアンケートなどやっていかないといけないと感じました。
- ・集団の中で生きるとなるとどの世界でも合う人がいて、合わない人がいるのは当たり前。けど、その中で子供は仲間外れにしたり、いじめをしたり、と悪い方向にいかってしまい、人との付き合い方に問題が出てしまう。その問題にいち早く気づき、解決することや、問題事態起こさないような教育をしていけるようになりたいと思った。
- ・集団指導を通して個の育成ができ、個の成長が集団を発展させることが理解できました。学級集団を理解するために「Q-U」アンケートを使い、その結果から今後の学級経営を考える必要があるなと思いました。
- ・QUを活用することで学級経営をより円滑に行うことができるように感じた。しかし、今回の事例検討のように、何も対応せずに放置してしまうのはいけないように感じた
- ・一部の生徒が楽しいと思う学校生活ではなく学校に居る生徒が全員楽しいと思う学校生活を作り上げるのが大切だと思った。学校全体の雰囲気を良くするにはクラスでの指導が大切だと思います。クラスの一つ一つが良くなれば学校の雰囲気も上がると感じました。
- ・良い学級集団の形成が生徒の学力やパフォーマンスの向上につながるということが理解できました。学級経営を上手く行っていくために、様々なテストやアンケートを使い子どもの現状を把握したり 日常生活から生徒をよく観察し、コミュニケーションをとり、子どもにとって身近に相談できる先生になりたいと思います。
- ・今回の授業では、学級の状況についてアンケートを通して具体的に測れる方法があることを初めて知った。アンケートを用いて学級の状況をしり学級崩壊などを未然に防ぐことも必要であるが、教師を目指す立場としては、アンケートに頼る前に児童生徒と教員間での強い信頼関係を構築し児童生徒同士や児童生徒と教員の繋がりをつくることか大切であると考えてる。
- ・私は、教員自身のリーダーシップを発揮し、適切なルール作りをしたい。なぜなら表を見ると散らばっており、指示が通っていない可能性があるからである。具体的にいうと、クラスをまとめ、ルールなどを全員に浸透させ過ごしやすい学級にする。よってよい学級づくりができると考えてる。

（\*原文のまま）